

8. 甲状腺癌 ^{131}I 内服治療時に生じた急性頸部浮腫の一症例

山口 元司 小泉 潔 内山 晓
 平池佐知子 南部 敦史 荒木 拓次
 遠山 敬司 (山梨医大・放)

甲状腺癌術後に ^{131}I 内服治療を試みた症例で、痛みの少ない急性頸部浮腫を主とする比較的珍しい副作用を経験した。症例は 35 歳女性。甲状腺乳頭癌により甲状腺亜全摘術を実施されたが、サイログロブリンの高値が続いたため、ablation を兼ね ^{131}I 20.35 GBq を内服した。約 8 時間後より右頸部の腫脹が出現し、その後圧痛や自発痛の少ない左右頸部の腫脹、嚥下困難、嚥下時痛、嗄声が出現した。CT にて頸部間質に広範な浮腫の存在を認めた。冷却、消炎剤投与で 5 日後軽快した。なお、CT にて測定した残存甲状腺重量は 4.6 g で、治療量投与直前の ^{123}I 摂取率(24 時間)は 25.5% であった。文献的に考察して、時折見られる放射線甲状腺炎とは異なる、急性頸部浮腫と考えられた。残存甲状腺が比較的多かつたため生じたものと考えられる。

9. 腺腫様甲状腺腫の診断における核医学検査の役割

石原美千代 日下部きよ子 太田 淑子
 小林 秀樹 有竹 澄枝 牧 正子
 (東京女子医大・放)

1988 年から 1992 年までの 5 年間に、臨床的に機能性腺腫または腺腫様甲状腺腫が疑われ、超音波検査および核医学検査が施行された 43 症例を対象として、腺腫様甲状腺腫の診断における核医学検査の役割を検討した。

その結果、腺腫様甲状腺腫は、約 60% が比較的軽い甲状腺機能亢進を呈し、多彩な ^{123}I シンチグラム所見を呈した。また、24 時間ヨード摂取率も種々の値を示した。

腺腫様甲状腺腫の診断における核医学検査の役割は、甲状腺の局所機能を観察することにあると考えられる。すなわち、hot nodule の存在からホルモン合成能および分泌能の亢進が推定され、また、cold nodule の存在は組織の破壊が進行していることを示唆する。

核医学検査は血中ホルモンレベルおよびヨード摂取率とあわせて、病態の把握に有用な手段と思われた。

10. ^{201}Tl -SPECT 法を用いた頸部腫瘍に対する放射線治療の効果判定

守屋 信和 (横浜市大・放)
 池上 匡 齊藤 節 (横浜南共済病院・放)

われわれは、肺癌、転移性脳腫瘍に対して放射線治療を施行する際、 ^{201}Tl -SPECT による効果判定が、造影 CT や MRI に比べ、癌組織の viability をより正確に反映している可能性を報告してきた。今回は頸部の転移性リンパ節腫大に放射線治療を施行し、その効果判定に対する ^{201}Tl -SPECT の有効性を検討した。胃癌、肺癌、喉頭癌から鎖骨上窩領域のリンパ節に転移を認めた計 3 例に対し治療前後の造影 CT、MRI の画像と ^{201}Tl -SPECT での集積を比較した。いずれも腫瘍の縮小に伴って ^{201}Tl 集積量の低下、消失を認めたが、delayed-image (4 hr) が、early image (15 分) よりも tumor viability を正確に反映するような印象を受け、少なくとも CT、MRI と同等以上の有効性が示唆された。

11. 脳腫瘍の ^{201}Tl -SPECT 像と Gd-DTPA 造影 MR 像

岡本 研 (横浜市大・放)
 齊藤 節 池上 匡 (横浜南共済病院・放)

TICl の腫瘍組織への集積のメカニズムを検討するために、脳腫瘍へのタリウム集積と MRI での Gd-DTPA による造影効果とを比較した。

髓膜腫 5 例、肺腺癌の脳転移 6 例、海綿状血管腫 2 例、星状膠細胞腫(Grade I) 2 例を対象に、 ^{201}Tl 静注後 10 分での腫瘍側と健常側のカウント比と、同レベルのスライスでの Gd-DTPA による造影効果〔腫瘍の信号強度(造影前一後)/対側(造影後)〕を比較した。髓膜腫と脳転移の間で、上記 2 種の値の比はほぼ同じであり、海綿状血管腫と星状膠細胞腫は ^{201}Tl の集積、Gd-DTPA による造影効果ともになかった。 ^{201}Tl 静注後の 10 分での腫瘍への集積と Gd-DTPA による造影効果には相関関係があると考えられる。